令和７年度　体育科実践・研究計画

部　員	○山田幹、加賀屋綾乃、佐々木駿斗

１　昨年度の成果と課題

昨年度の実践を通して、体育科における自律した学習者の姿が見えてきた。

①　３年の跳び箱運動の学習では、単元の最初に６年生が跳び箱を跳んでいる動画を見せた。子どもたちは動画を見た瞬間に、「踏切りが強い」「跳び箱の奥にちゃんと手がついてる」など、よいところを見付け、言語化する姿が見られた。子どもの発言を「動きのこつ」としてまとめ、共通理解を図った。演技をする人、アドバイザー、撮影者といった役割分担ができるように３～４人でグルーピングをして学習を進めた。すると、子どもが自発的に動画を見返し、自分の動きとお手本の動きを比較しながら改善点を探したり、友達のよい動きを見て、動きのこつを発見したりする姿が見られた。運動にひたすらに取り組ませるだけでなく、教師が意図をもって、教材や自分の動きと向き合う時間を十分に設けることが大切だと分かった。ゴールとしてふさわしく、目標とする姿として追究したくなるようなレベルの手本と、様々な視点からの映像や複数の他者からの意見や感想などが効果的であると考える。

②　６年のボールゲームの学習では、ゴール型、ネット型の学習の際に、「ボールが来る位置に動くと次の動きにつなげやすくなる」「ボールに触っていない人が自由に動けるから、その人たちの位置が大事だ」というどちらの型にも共通した動きのこつに気付き、活用する児童の姿が見られた。また、以前に学習をしていたベースボール型のボールゲームともつなげながら「隙間があるとそこを狙われる。守る時は隙間を作らないようにポジションを決めると効果的だ。」という考えを子どもが導き出していた。身に付けた動きのこつを個人の中の学び、その単元のみの学びにするのではなく、友だちの学びや他の単元の学びにつなげることで、落としてはいけない大事なこつや、あらゆる状況に活用できるこつに気付き、活用しようとする姿が見られた。このことから、動きのこつを書き残したり、全体で共有したりすることをどの単元でも継続して行うことは、学んだ動きのこつを他種目と関連付けて考えることにつながり、自ら学びを進めていくことに寄与すると考えられる。

③　体育科の学習では動きのこつを見付け、共有できる場面や機会を設けてきた。一方で、運動時間の十分な確保が課題だった。また、スモールステップの場づくりを工夫することで子どもが自ら選択・決定し、学習を進められるようにしたものの、大きな成長や変化をもたらせそうなタイミングで適切な支援、言葉掛けができていないこともあった。だからこそ、児童が自ら気付く機会を設けたり教師が児童に適切な働きかけをしたりする手立てが必要に感じた。

こうした成果と課題を踏まえ、体育部は、自律した学習者の姿を次のように捉える。また、自律した学習者が育つ授業デザインの具体的な取組を次のように設定する。

２　体育科における自律した学習者の姿

①　自分のできることとできないことを捉え、自ら課題を設定する姿
②　身に付けた動きのこつを、他種目の動きに活用しようとする姿
③　自他の課題解決に向け、適切な場や練習方法を考え試行したり、動きのこつを基に仲間に助言したりしようとする姿

３　授業デザインの具体的な取組

○現状に基づいた課題を設定できるように、どうなりたいのかという思いや願いをもてるような場の工夫をする。
○動きのこつを記録し、それらを整理・分析する場を設定する。
○児童が課題解決のための練習の場や練習の方法を友達と意見交換する中で選択していける場の設定を工夫する。